

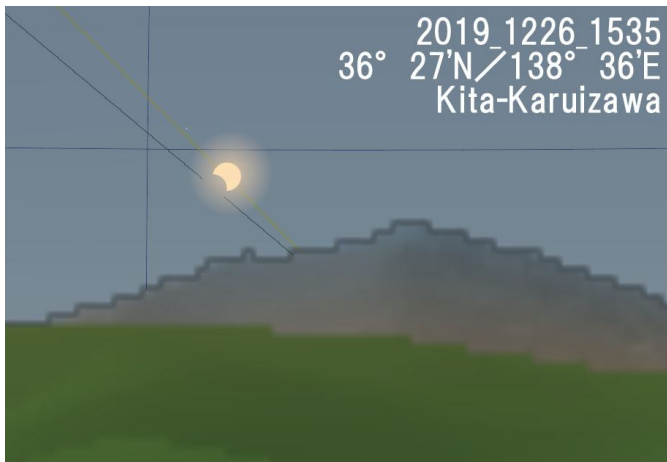
「日入帯食」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

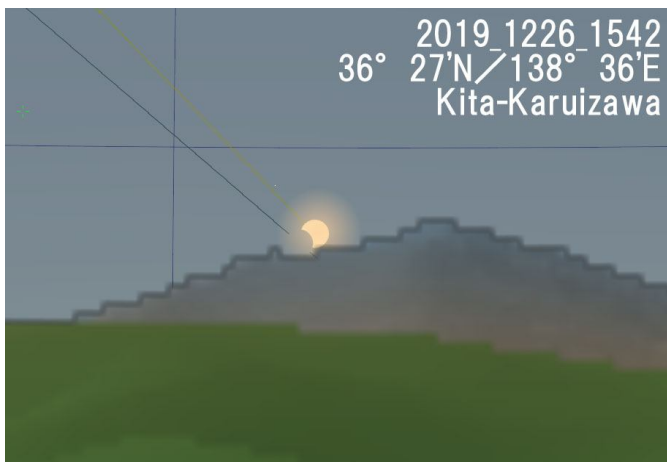
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

2019年12月26日に日本各地で見られる「部分日食」は少し特別な日食である。欠けた状態で---つまり太陽と月の一部が重なった状態のまま、西の空に沈むのだ。この現象を「日入帯食」(にちにゆうたいしょく)とか「日没帯食」(にちぼつたいしょく)といい、比較的珍しい天文現象である。



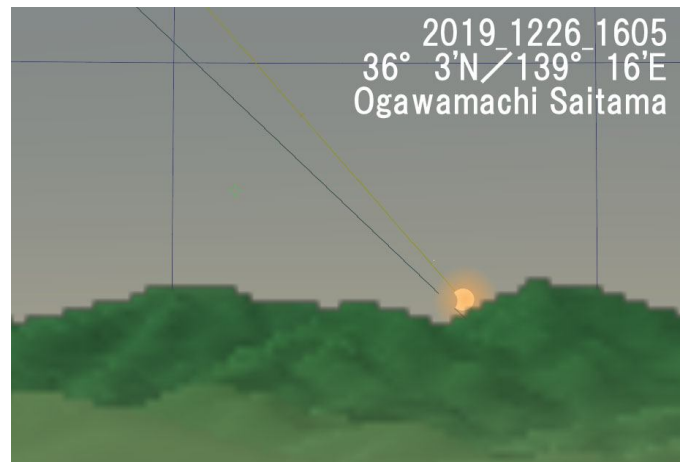
「日入帯食」を観察するには、地形と太陽の方位の関係をよく調べておく必要がある。太陽が沈みかけた時に観察しなければ、普通の部分日食と何も変わらないからだ。太陽が沈む南西方位に高い山があれば、それだけ日没は早くなる。図は、当日北軽井沢から見た、太陽の様子だ。最大食時刻の15:35には、すでに浅間山の稜線に迫っている。



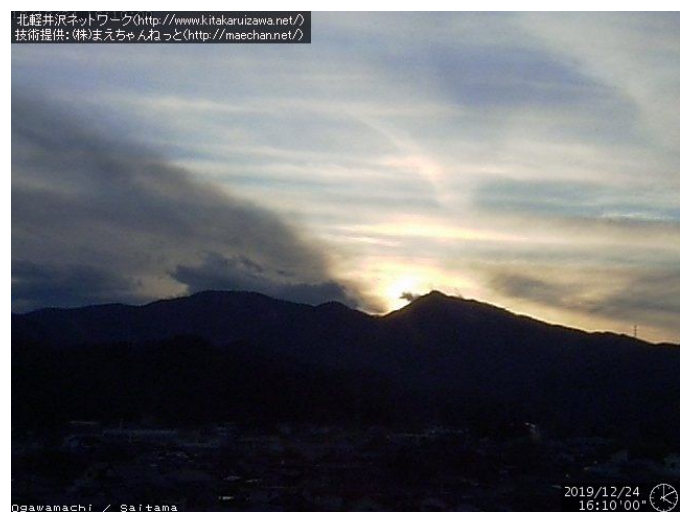
その7分後、太陽は浅間山の稜線にかかり、「日入帯食」が始まる。太陽は「その直径分」を約2分で移動するので、この珍しい現象は2分で終わってしまう。



実際の地形はこのように見える。浅間山山頂部の左側の稜線に、欠けた太陽が沈むはずだ。このカメラは東京の自宅からでも、外出先のスマホからでも操作可能なので、当日はうまく撮影できそうだ。



埼玉県小川町からはこのように見える。市街地からは小川三山の右の山(笠山)の稜線に沈むように見える。浅間山よりも低く、観測地からも遠いので、山頂の仰角が浅く、16:05頃に日入帯食となりそうだ。



実際の風景(日没時)はこのように見える。夕焼け空に、美しい日入帯食が見られそうだ。